

14 2010 年度わが国貿易収支、経常収支の見通し

2009年12月4日発表
社団法人日本貿易会

I . 要 旨

1. 商品別貿易の見通し（通関ベース）

● 2009 年度 ～ 過去最悪の下落幅ながら輸出入とも下半期に持ち直し

輸出総額は、前年度比 19.9%減の 57 兆 0,170 億円。1970 年度以降では過去最悪の下落幅。輸出数量は、同 14.3%減と 2 年連続 2 けた減少するが、中国などアジア向けを中心に化学製品、電気機器、輸送用機器などは下半期回復。輸出価格は、円高を主因に同 6.5%下落。

輸入総額は、前年度比 26.8%減の 52 兆 6,430 億円。1970 年度以降では過去 2 番目（1986 年度同 30.6%減が過去最悪）の下落幅。国内需要減退で輸入数量が同 14.1%減となったほか、原油・鉱物資源・穀物など一次産品価格の大幅下落に円高の影響も加わって、輸入価格も同 14.8%下落。

● 2010 年度 ～ 輸出は数量増、輸入は価格上昇を背景に 3 年ぶり増加

輸出総額は、61 兆 4,770 億円で前年度比 7.8%増。輸出数量は、同 6.1%増で 2009 年度下半期からの回復が継続。世界経済回復を背景に船舶を除くすべての品目が増加。輸出価格も同 1.7%上昇。

輸入総額は、56 兆 6,070 億円で前年度比 7.5%増。輸入価格は、原油・鉱物資源などの価格上昇から同 6.7%上昇。輸入数量は、3 年ぶりの増加に転じるが、国内需要の回復力乏しく同 0.8%増にとどまる。

2. 経常収支の見通し

● 2009 年度 ～ 原油安、輸出底入れから経常収支黒字は 2 年ぶり拡大

経常収支黒字は、貿易・サービス収支の黒字化から 15 兆 2,560 億円と 2 年ぶりに黒字を拡大。貿易収支黒字は、原油安による輸入の大幅減を主因に前年度比 4 兆 3,590 億円増の 5 兆 5,180 億円と急増。サービス収支赤字は 2 兆 0,540 億円で、輸送収支、旅行収支とも大きな変動はなくほぼ横ばいにとどまる。この結果、貿易・サービス収支は 3 兆 4,640 億円で 2 年ぶりに黒字化。一方、所得収支黒字は 2 年連続減少し、海外金利の低下と円高により同 1 兆 5,440 億円減の 13 兆 0,100 億円。

● 2010 年度 ～ 経常収支黒字は輸出回復を背景に 2 年連続拡大

経常収支黒字は 16 兆 5,730 億円で、前年度比 1 兆 3,170 億円の増加。輸出入とも 3 年ぶりの増加に転じるが、輸出の伸びが輸入を上回り、貿易収支黒字が 6 兆 0,930 億円と拡大が継続。一方、サービス収支赤字は 2 兆 0,910 億円で、原油安一服などから旅行収支・運輸収支とも赤字が若干拡大。この結果、貿易・サービス収支黒字は、4 兆 0,020 億円で同 5,380 億円の拡大にとどまる。所得収支黒字は 13 兆 7,820 億円で、海外金利の上昇などに伴う円ベース受け取り金額の増加から同 7,720 億円の黒字拡大。

II . 総括表

【通関貿易】

項 目	2008 年度 実績		2009 年度 見込み		2010 年度 見通し	
	(10 億円)	対前年度比 伸び率 (%)	(10 億円)	対前年度比 伸び率 (%)	(10 億円)	対前年度比 伸び率 (%)
通関貿易収支	▲727	▲10,882	4,374	5,101	4,871	496
輸 出	71,145	▲16.4	57,017	▲19.9	61,477	7.8
		▲14.3		▲14.3		6.1
		▲3.4		▲6.5		1.7
輸 入	71,872	▲4.1	52,643	▲26.8	56,607	7.5
数量要因		▲5.7		▲14.1		0.8
		0.5		▲14.8		6.7

【経常収支】

項 目	2008 年度 実績		2009 年度 見込み		2010 年度 見通し	
	(10億円)	対前年度比 増減、伸び率	(10億円)	対前年度比 増減、伸び率	(10億円)	対前年度比 増減、伸び率
貿易・サービス収支	▲888	▲9,978	3,464	4,352	4,002	538
	1,159	▲10,527	5,518	4,359	6,093	575
		▲16.3		▲19.9		▲7.8
		▲3.9		▲26.8		▲7.5
	▲2,047	▲549	▲2,054	▲7	▲2,091	▲36
所得収支	14,553	▲2,201	13,010	▲1,544	13,782	772
経常移転収支	▲1,329	▲29	▲1,218	111	▲1,212	7
経常収支	12,336	▲12,208	15,256	2,919	16,573	1,317

(注) 金額は億円単位を四捨五入

Ⅲ. 商品別貿易の見通し（通関ベース）

1. 輸 出

◆◆◆ 2009 年度 ◆◆◆

世界経済が各国協調した政策総動員の効果から上半期に最悪期を脱し、円高懸念がくすぶるものの日本の輸出環境は徐々に好転している。輸出金額は前年度比 19.9%減で 1970 年度以降では過去最悪の下落幅が見込まれるが、下半期には持ち直しに転じる見通し。輸出数量は同 14.3%減と 2 年連続の 2 けた減が見込まれるが、中国を中心としたアジア向けを先導役に年央以降持ち直しに転じている。輸出価格は同 6.5%減で、円高の進行により 08 年度（同 3.4%減）よりさらに下落する。

商品別では、中国の家電・自動車向けに化学製品がいち早く立ち直り、次いで中国を含むアジア向けに半導体等電子部品、自動車の部分品が回復に転じている。自動車は各国の購入支援策の効果から夏場以降回復が鮮明化。高水準の受注残を抱える船舶は、年度を通して唯一増加する。一方、設備投資先送り・凍結の影響から一般機械、鉄鋼の回復が遅れる見込み。

◆◆◆ 2010 年度 ◆◆◆

新興国を中心に世界経済が緩やかな回復を続ける中、輸出数量の増加を背景に輸出金額は前年度比 7.8%増と 3 年ぶりに増加する。

商品別では、船舶を除くすべての品目が増加に転じる。引き続き中国を中心としたアジア向けに化学製品・半導体等電子部品・自動車の部分品などが増勢を維持する。自動車は購入支援策終了で先進国向けが冴えないものの、新興国向けは堅調。鉄鋼はアジア向けの自動車・家電用鋼板を中心に増加。一般機械は IT 投資関連の電算機類は増加に転じるが、産業機械は引き続き低調な見通し。

2. 輸 入

◆◆◆ 2009 年度 ◆◆◆

国内景気は輸出主導で回復に向けた動きを見せているが、内需は引き続き低調で輸入の回復が遅れている。円高、原油安の進行で輸入価格は大幅に下落し、輸入金額は前年度比 26.8%減となり、プラザ合意直後の 1986 年度（同 30.6%減）以来、過去 2 番目の大幅な落ち込みが見込まれる。

商品別に見ると、原油及び粗油・石油製品・非鉄金属鉱は市況反転、半導体等電子部品は薄型テレビの販売好調などによっておのおの下半期増加するが、年度を通しては大幅に減少。一方、設備投資減少から原料別製品の鉄鋼・非鉄金属・電算機類などの一般機械は冴えず、食料品も消費低迷で回復が遅れる。

◆◆◆ 2010 年度 ◆◆◆

輸入金額は前年度比 7.5%増と 3 年ぶりに増加に転じるが、国内需要の回復力が限られる中で数量の伸び悩みが続き、原油安一服などによる価格上昇に依存した増加にとどまる見込み。

商品別では、単価下落などを背景に電算機類を中心とした一般機械が引き続き減少するものの、他の品目はすべて増加に転じる。特に、鉄鉱石などの原料品や鉄鋼・アルミなどの原料別製品は市況回復や国内生産持ち直しによって前年度比 20%超の増加が見込まれる。輸送用機器も航空機の代替需要を中心に同 10%強程度まで回復するが自動車は伸び悩み。また、鉱物性燃料は、原油安一服などで増加に転じるが数量面での回復力は乏しい。食料品も増加に転じるが、魚介類・肉類とも消費低迷の影響を受けて増勢が鈍い。

Ⅳ. 経常収支の見通し

◆◆◆ 2009 年度 ◆◆◆

輸出入金額とも大幅な減少が継続するが、原油安などで輸入減少幅の方が大きく、貿易収支黒字は 5 兆 5,180 億円と前年度比で大幅に拡大。サービス収支赤字は、輸送収支、旅行収支とも大きな変動はなくほぼ横ばいにとどまる。所得収支黒字は、海外金利の低下と円高による円ベース受け取り金額の減少により 2 年連続縮小。この結果、経常収支黒字は 15 兆 2,560 億円となり、2 年ぶりに黒字を拡大させる。

◆◆◆ 2010 年度 ◆◆◆

世界経済の回復や原油安一服などを背景に輸出入金額とも 3 年ぶりの増加に転じ、貿易収支黒字も 6 兆 0,930 億円と 2 年連続で黒字が拡大する。サービス収支赤字は、原油安一服などの影響で旅行収支・運輸収支とも赤字が若干拡大。所得収支は、海外金利の上昇などにより黒字幅が 3 年ぶりに拡大。この結果、経常収支黒字は 16 兆 5,730 億円と 2 年連続拡大するが、09 年度に比べ増勢は鈍い。

Ⅴ. 前提条件

【前提条件】

項 目	2008 年 実績	2009 年 見込み	2010 年 見通し
世界貿易 (暦年)	2.7 %	▲12.1 %	2.7 %
世界経済 (暦年・実質)	3.0 %	▲1.1 %	2.9 %
米 国	0.4 %	▲2.7 %	1.6 %
ユーロ圏	0.7 %	▲4.1 %	0.3 %
アジア	6.7 %	4.9 %	6.8 %
日本経済 (暦年・実質)	▲3.2 %	▲3.2 %	1.0 %

(注 1) アジアは IMF 定義による「アジア途上国 (26)」 + 「NIES (4)」の 30 カ国ベース
(注 2) 上記の前提条件に加え、10 月中旬の外国為替市場および原油市場の動向を参考に、円相場は 2009 年度 93 円 / ドル、原油入着価格は 2009 年度 70 ドル / バレル、2010 年度 75 ドル / バレルとの前提条件において積み上げ作業を実施

以上

2010 年度わが国貿易収支、経常収支の見通し（商品別輸出）

輸 出	2008 年度（実績）		2009 年度（見込み）				2010 年度（見通し）				コメント	
	10 億円	伸率 %	上半期		下半期		10 億円	伸率 %	10 億円	伸率 %		
			（実 績）	伸率 %	（見込み）	伸率 %						
総 額	71,145	▲16.4%	27,280	▲36.4%	29,737	▲4.6%	57,017	▲19.9%	↑	61,477	+7.8%	
食料品	384	▲7.8%	177	▲13.5%	171	▲4.4%	348	▲9.2%	↑	352	+1.1%	魚介類は、サケが価格上昇で海外からの引き合いが弱まり低迷。穀物は、数量・価格とも前年を下回る水準で推移。
原料品	941	▲13.5%	447	▲27.2%	452	+38.4%	900	▲4.4%	↑	1,002	+11.4%	金属鉱及びくずは、主要品目の鉄スクラップが海外需要の増加により数量ベースで増加傾向。価格も足元では低迷するものの持ち直しつつあり、下半期には総額ベースで前年を上回る見込み。生ゴムは、合成ゴムの需要が、自動車生産縮小に伴い低迷。年度後半にかけて価格・数量ともに回復。繊維物繊維及びくずは、合成繊維（短繊維）を中心に在庫調整進展の結果、価格は下支えされて横ばいで推移するが、需要は盛り上がり欠ける。
鉱物性燃料	1,708	+43.2%	534	▲53.8%	570	+3.3%	1,104	▲35.4%	↑	1,164	+5.4%	上半期の石油製品の輸出額は、軽油・灯油の大幅減を受け、50%以上の減少。通年では、2008 年度の資源価格高騰の反動による価格の大幅下落もあり、3 割程度の減少。ジェット燃料、軽油の国内製品は国内市況の低迷から輸出に振り向けられる傾向にあるが、海外市況も需要減少を受けて低迷しており、2009 年度下半期の輸出数量も微減。
化学製品	6,475	▲17.2%	3,035	▲23.6%	3,077	+23.0%	6,112	▲5.6%	↑	6,625	+8.4%	2008 年秋に発生した金融危機により世界の化学品の需要は大きく落ち込み、日本の輸出も 2009 年 1 月には危機前の半分以下にまで落ち込んだが、その後、中国の景気刺激策の効果により、自動車や家電向けを中心に化学品の輸出は急速に持ち直し、2009 年度後半は危機前の 8 ～ 9 割程度の水準にまで回復する見込み。
原料別製品	9,231	▲8.4%	3,466	▲35.7%	3,800	▲1.1%	7,266	▲21.3%	↑	7,978	+9.8%	鉄鋼は、国内需要低迷も自動車向けを中心に輸出は底打ち。銅などの非鉄金属は、下半期の市況上昇により通年の落ち込みは穏やか。総じて、上半期は大幅に落ち込んでいるものの、下半期にはアジアを中心に世界経済が回復の兆しを見せたことを受け、下げ止まりの動き。
鉄鋼	4,227	+2.0%	1,388	▲42.6%	1,510	▲16.6%	2,898	▲31.4%	↑	3,108	+7.2%	国内需要の低迷が続く一方、鉄鋼輸出は、専場から増加傾向をたどっており足元は 350 万トン超/月の高いレベルとなり自動車用鋼板を中心に輸出依存度が高まっている。世界経済は自律的回復には至っておらず、各国の経済対策が一巡した後の需要の反動減に対する警戒感も強まり今後の動きが不透明。さらに中国の供給過剰状態が深刻化、また、足元、輸出市況が下落基調に転じるなど、アジアを中心に鉄鋼需要の先行きが極めて不透明な状況。
非鉄金属	1,269	▲20.7%	540	▲31.8%	642	+34.8%	1,182	▲6.8%	↑	1,348	+14.0%	銅は、数量微増、価格上昇傾向。アルミは、リーマン・ショック後の需要減少および円高の影響で数量減少。
織物用糸・繊維製品	695	▲14.8%	283	▲27.8%	286	▲5.4%	569	▲18.1%	↑	650	+14.2%	産業用途のうち特殊繊維などは、自動車などの生産減少にあわせて輸出が急落。糸など原材料は、そのほか、円高、国内生産撤退などの動きも減少要因。
非金属鉱物製品	806	▲16.0%	366	▲24.8%	391	+22.3%	757	▲6.1%	↑	816	+7.8%	非金属鉱物製品は、下半期にかけて価格・数量とも緩やかに持ち直す見込み。ガラス及び同製品は、板ガラスなど、原料コスト上昇の転化により価格がわずかに上昇。数量ベースでは、下半期に建築・車両用を中心にアジア向け需要が増加。セメントはアジア向けを中心に数量が若干増加し、価格も国内での値上げを反映しわずかに上昇。
一般機械	14,026	▲16.6%	4,623	▲44.4%	5,074	▲11.2%	9,697	▲30.9%	↑	10,152	+4.7%	上半期は、建設用・鉱山用機械、金属加工機械が減少し、輸出金額は軒並み 4 割以上の減少。下半期は、電算機類の輸出数量はやや持ち直すが、原動機、金属加工機械類等の需要の大幅な回復はない。
電算機類（含周辺機器）	631	▲27.3%	212	▲43.6%	228	▲10.2%	440	▲30.2%	↑	462	+4.9%	上半期は、電算機類に加え周辺機器も輸出数量が大幅に減少。またアジアを中心に低価格製品の需要が相対的に高まった結果、単価も下落傾向にあり、4 割以上の減少。上半期の輸出数量の増加は IT 投資の先送りによる側面もあり、下半期は緩やかに輸出数量が回復する可能性もあるが単価は下落傾向。
電算機類の部分品	1,483	▲19.5%	603	▲30.6%	650	+6.0%	1,254	▲15.4%	↑	1,360	+8.5%	上半期は、輸出数量の大幅な減少により輸出金額は 3 割の減少。下半期は、上半期に先送りされた IT 投資が実行に移され、緩やかに需要回復し数量ベースでは上半期をやや上回るものの、前年の輸出量には及ばない。
電気機器	13,571	▲18.9%	5,630	▲31.7%	5,933	+11.5%	11,563	▲14.8%	↑	12,095	+4.6%	2008 年度後半からの景気後退の影響を大きく受け、2009 年度前半に半導体等電子部品を中心として大幅な減少。各国景気対策により年度後半で増加するも、全体で大幅減。
半導体等電子部品	4,068	▲19.7%	1,838	▲27.0%	1,870	+20.6%	3,708	▲8.9%	↑	3,882	+4.7%	年度後半からの景気刺激策効果により増加傾向にあるが、前半の落ち込みをカバー出来ず、通年では大幅に減少。
輸送用機器	16,891	▲20.9%	5,834	▲43.3%	7,210	+9.1%	13,044	▲22.8%	↑	14,206	+8.9%	自動車輸出は、2008 年度後半以降の金融危機で、全市場向けで大幅激減。上半期は、先進国で約 70%減、新興国向けも 50%近い落ち込み。夏以降、各国のスクラップインセンティブで持ち直し、特に中国向けは危機前まで回復。下半期は、数量ベースでは前年割れが続くものの、前年同期に在庫調整のための大幅な値引きがあったため、金額では増加に転じる。船舶は 2 年以上先まで契約が進んでおり、目先の落ち込みはない見通し。円建ての契約が多く、通貨レートの変動の影響は少ない。
自動車	11,129	▲24.2%	3,330	▲53.8%	4,164	+6.0%	7,494	▲32.7%	↑	8,243	+10.0%	2008 年度後半以降の金融危機で、全市場向けで大幅激減。上半期は、先進国で約 70%減、新興国向けも 50%近い落ち込み。夏以降、各国のスクラップインセンティブで持ち直し、特に中国向けは危機前まで回復。下半期は、数量ベースでは前年割れが続くものの、前年同期に在庫調整のための大幅な値引きがあったため、金額では増加に転じる。
自動車の部分品	2,627	▲22.3%	1,189	▲26.4%	1,316	+30.0%	2,505	▲4.6%	↑	2,882	+15.0%	2008 年 10 月以降の金融危機で大幅に下落。夏以降、アジア向けを中心に回復。
船舶	1,981	+4.3%	937	+9.6%	1,330	+18.1%	2,267	+14.5%	↓	2,201	▲2.9%	2 年以上先まで契約が進んでおり、目先の落ち込みはない。円建ての契約が多く、通貨レートの変動の影響は少ない。
その他	7,918	▲17.7%	3,534	▲25.0%	3,450	+7.6%	6,984	▲11.8%	↑	7,903	+13.2%	科学光学機器、記録媒体、写真用・映画用材料などは、いずれも下半期は回復傾向に。ただし、回復具合には濃淡。「その他」項目は全体のほぼ半分を再輸出が占めており、再輸出は、おおむね輸出全体の趨勢と類似して推移。
科学光学機器	1,773	▲17.2%	829	▲24.1%	820	+20.6%	1,649	▲7.0%	↑	1,814	+10.0%	先進国の設備投資の減少と資源国や途上国での投資の見直しや延期で計測機器類が減少。下半期は、前年同期の大幅下落の反動で増加。

* 金額は億円単位を四捨五入
* 「↑」は前年度比増加、「↓」は減少、「→」は横ばい（前年度比±1%未満）を表している

2010 年度わが国貿易収支、経常収支の見通し（商品別輸入）

輸 入		2008 年度（実績）		2009 年度（見込み）				2010 年度（見通し）				コメント	
				上半期		下半期							
		10 億円	伸率 %	(実績)	伸率 %	(見込み)	伸率 %	10 億円	伸率 %	10 億円	伸率 %		
総 額		71,872	▲4.1%	25,327	▲39.9%	27,316	▲9.6%	52,643	▲26.8%	↑ 56,607	+7.5%		
食料品		5,990	▲0.8%	2,549	▲21.8%	2,433	▲10.9%	4,982	▲16.8%	↑ 5,232	+5.0%	魚介類は、マグロやエビなどの高価格品を中心に需要が不振で減少継続。肉類は、豚インフルエ ンザ、鶏肉在庫の積み上がり、牛肉需要の低迷などで総じて低値に推移。とうもろこしは、前年 の価格大幅上昇の反動で、輸入額は減少継続。小麦は、価格低下を見越した買い控えにより輸入 数量が減少。	
魚介類		1,386	▲6.4%	623	▲16.7%	605	▲5.1%	1,228	▲11.3%	↑ 1,246	+1.4%	まぐろは、消費者の低価格志向により、高級部位を中心に需要低迷。えびは、消費者の低価格志 向による単価低下と需要低迷により、下半期もほぼ横ばいで推移。サケ・マスは、需要が低迷す る一方、価格は海外相場により横ばいで推移し、通年でわずかに前年を上回る。	
肉類		1,071	+5.2%	451	▲19.5%	404	▲20.8%	855	▲20.1%	↑ 879	+2.8%	牛肉は、豪州産の相場が一時上昇するも、供給が持ち直し価格は再び低下。低価格志向による需 要の低迷、豚・鶏の、フににより減少継続。豚肉は、インフルエンの風評被害による需要の 落ち込みと、国産の価格の供給過剰で低下した結果、輸入品の引き合いが低迷。鶏肉は 在庫の積み上がりにより輸入数量・価格とも大幅に低下していたが、在庫調整の進展により年度 後半にかけて持ち直しの動き。	
原料品		5,008	▲10.9%	1,627	▲44.8%	1,900	▲7.7%	3,527	▲29.6%	↑ 4,280	+21.3%	鉄鉱石は、粗鋼生産低迷など国内需要不振のため、数量・市況共に下落し大幅減。非鉄金属鉱は、 通年では減少するも、下半期は市況上昇により増加。	
鉄鉱石		1,330	+24.4%	393	▲45.8%	395	▲34.8%	788	▲40.8%	↑ 950	+20.6%	鉄鉱石は、世界経済回復に伴い、粗鋼向けなどの需要回復が見込まれ、数量・市況共 に緩やかに回復するが 2008 年度の水準には届かない。非鉄金属鉱は、数量・市況共 に回復し、2008 年度水準にまで回復が見込まれるが、加工賃の悪化、円高、副産物 処理等の下振れ要因が残る。	
非鉄金属鉱		1,391	▲32.6%	478	▲45.5%	628	+22.3%	1,107	▲20.4%	↑ 1,350	+22.0%	2010 年度数量は、2008 年度上半期輸入量の通期換算値 (1.41 億トン) と 2009 年度 の上半期輸入量の通期換算値 (年間数量 0.99 億トン) の中間値 (1.2 億トン) 並。鉄鉱石 価格は、2009 年度下半期鉄鉱石価格から 10% 上昇 (\$74.66/DMT)、プレーは 2009 年 度並。	
鉱物性燃料		24,481	+10.1%	6,850	▲55.7%	7,843	▲13.0%	14,693	▲40.0%	↑ 15,729	+7.0%	2010 年の銅鉱石は、数量は上半期から横ばい。市況は中国の旺盛輸入およびドル安、投機資金 の流入、世界経済回復期待等を受け上昇。	
原油及び粗油		13,640	▲0.4%	3,810	▲59.3%	4,465	+4.1%	8,275	▲39.3%	↑ 8,745	+5.7%	原油及び粗油は、国内の需要が依然低迷する見通しだが、輸入金額は 2009 年度の大 幅減の反動から増加。	
石油製品		2,001	▲5.6%	596	▲55.9%	773	+18.9%	1,368	▲31.6%	↑ 1,440	+5.2%	原油価格は緩やかな上昇基調。景気の低迷から国内需要が低迷するほか、原子力 発電所の稼働の影響もあり、輸入数量は 2009 年度の水準をやや下回る。	
LNG		4,498	+29.5%	1,198	▲49.3%	1,398	▲34.6%	2,596	▲42.3%	↑ 2,790	+7.5%	上半期は、前年度の原油価格の高騰の反動に加え需要の減退もあいまって 55.9% の大幅減。下 半期の資源価格はやや緩やかに上昇。国内の石油製品需要は引き続き減少しており、石油会社、石油 化学会社共に稼働率を下げざるを得ない状況で、電力用重油についても経済停滞の影響で需要は 激減（ただし下半期は前年の稼働率の反動により増加）。	
LPG		994	▲9.2%	270	▲54.4%	344	▲14.3%	614	▲38.2%	↑ 680	+10.7%	上半期は、2008 年度の資源価格高騰の反動から、金額で 49.3% 減、数量ベースでも需要減少 を背景に 1 割程度の減少。下半期も、上半期末に比べ需要は横ばいあるいは微減。輸入単価は、原 油価格との関連で強く、上昇。	
石炭		3,253	+82.4%	968	▲44.5%	860	▲43.0%	1,828	▲43.8%	↑ 2,014	+10.2%	国内景気の低迷が続き、需要は微減傾向を見込むが、資源価格は緩やかな上昇傾向 にあり、単価ベースでは（2009 年度末）緩やかな上昇。	
化学製品		5,407	▲2.0%	2,282	▲23.0%	2,347	▲3.9%	4,628	▲14.4%	↑ 4,974	+7.5%	上半期は、数量ベースで 1 割減であったが、金額では資源価格の下落を背景に 54% 減。今後 の原油価格は緩やかな上昇を見込む。数量ベースでは、景気低迷によって特に産業部門の需要が低 迷し、さらに減少。	
原料別製品		6,688	▲8.8%	2,090	▲47.7%	2,350	▲12.6%	4,440	▲33.6%	↑ 5,500	+23.9%	需給面および金融面から、原料材、一般財共に、価格は大幅に下落。2010 年にかけて 鉄鋼の対中輸出の鈍化が見込まれ、内需も弱い。大口電力も回復鈍く、下半期は数量も減少継続。	
鉄鋼		1,122	+16.3%	205	▲68.8%	201	▲57.0%	406	▲63.9%	↑ 456	+12.4%	2008 年度後半に自動車等の生産が大きく落ち込んだことから国内の化学品の需要も低迷して いたが、2009 年度に入り自動車や電気機械などの生産が回復に向かう中で化学品の需要も高まっ てきており、2009 年度後半も輸入は緩やかに持ち直していく。	
非鉄金属		2,147	▲18.0%	481	▲67.0%	650	▲5.9%	1,131	▲47.3%	↑ 1,550	+37.0%	鉄鋼輸入は、リーマン・ショック後の国内需要低迷を受け大幅に減少し、低迷は当面継続。一方、 鉄鋼輸入は、国内需要の低迷や国内市況も盛上りがに動き。その他の製品も、下半期には自動車 生産回復等を受け下げ止まりつつある。	
織物用糸・繊維製品		683	▲6.6%	300	▲18.4%	308	▲2.1%	608	▲10.9%	↑ 661	+8.7%	アルミは、上半期は国内景気低迷により大幅減となったが、下半期にエコカー減税などの経済政 策効果を受け持ち直しの動き。白金族の金属は、リーマン・ショック以降、市況低迷および需要 減退から、上半期は大幅に減少、下半期は市況回復を受け持ち直し。	
非金属鉱物製品		626	▲12.6%	243	▲32.5%	263	▲1.2%	506	▲19.2%	↑ 532	+5.2%	自動車、電気機器などの部材、包装用などの産業用途が、急激。リネンなどの最終消費財も、国 内景気悪化の低下で減少。価格も、産業用、最終消費用にそれぞれ下落傾向。	
一般機械		5,539	▲14.3%	2,092	▲32.8%	2,069	▲14.6%	4,161	▲24.9%	↓ 3,948	▲5.1%	ガラス及び同製品は、上半期は国内景気低迷により、自動車、建設向け需要とも不振。下半期 は自動車向け需要は徐々に持ち直しの動き。	
電算機類（含周辺機器）		1,636	▲11.6%	627	▲28.3%	659	▲13.5%	1,286	▲21.4%	↓ 1,231	▲4.3%	ガラス及び同製品は、国内景気が徐々に回復し、建設向け需要には底入れの動きが出 るものの、自動車はエコカー減税の政策実施による減速が懸念される。	
電気機器		7,737	▲16.9%	3,272	▲25.5%	3,723	+11.3%	6,995	▲9.6%	↑ 7,264	+3.8%	電算機類は、ネットブック/パソコンなど、PC および周辺機器の価格低下傾向は継続。上半期は、 需要悪化に加え、後半もはパソコンの買い控えが続き、下半期はパソコンの需要は回復しな が、年度を通じた数量への貢献は限定的。半導体等製造装置等、一部に回復の兆し もあるが、工作機械や建設・鉱山用機械の一部は回復しない。	
半導体等電子部品		2,133	▲24.2%	944	▲27.4%	1,033	+24.0%	1,977	▲7.3%	↑ 2,040	+3.2%	クラウド化、廉価版 PC の普及で価格下落は続く。ただし、景気回復に伴い、数量・ 価格とも、下げ止まり傾向へ。数量ベースでは増加し、電算機の部分では、PC 部 品（DRAM モジュール等）やプリンター・コピー等若干の回復。	
輸送用機器		2,038	▲21.0%	682	▲44.4%	744	▲8.2%	1,426	▲30.0%	↑ 1,588	+11.3%	クラウド化、廉価版 PC の普及で価格下落は続く。ただし、景気回復に伴い、数量・ 価格とも、下げ止まり傾向へ。数量ベースでは増加し、電算機は増加。	
自動車		659	▲28.4%	208	▲45.6%	248	▲9.9%	456	▲30.7%	↑ 468	+2.5%	トランジスタ等は、価格の低下止まりと、半導体製品の引き合い増加により、増加 で推移。IC 製品は、価格の低下止まりと、半導体製品の引き合い増加により、増加 で	

* 金額は億円単位を四捨五入、2009 年度上半期の実績は 9 月速報ベース

* 「↑」は前年度比増加、「↓」は減少、「→」は横ばい（前年度比±1%未満）を表している

魚介類は、マグロやエビなどの高価格品を中心に需要が不振で減少継続。肉類は、豚・インフルエンザ、鶏肉在庫の積み上がり、牛肉需要の低迷などを経て低値に推移。とうもろこしは、前年の価格大幅上昇の反動で、輸入額は減少継続。小麦は、価格低下を見越した買い控えにより輸入数量が減少。

まぐろは、消費者の低価格志向により、高級部位を中心に需要低迷。えびは、消費者の低価格志向による単価下落と需要低迷により、下半期もほぼ横ばいで推移。サケ・ますは、需要が低迷する一方、価格は海外需要により横ばいで推移し、過年でわずかに前年を上回る。

牛肉は、豪州産の相場が一時上昇するも、供給が持ち直し価格は再び低下。低価格志向による需要の低迷、豚・鶏へのシフトにより減少継続。豚肉は、インフルエンザの鳥群被害による需要の落ち込みと、国産品の価格が供給過剰によって下落した結果、輸入品の引き合いが低迷。鶏肉は、在庫の積み上がりにより輸入数量・価格とも大幅に低下していたが、在庫調整の進展により年度後半にかけて持ち直しの動き。

鉄鉱石は、粗鋼生産低迷など国内需要不振のため、数量・市況共に下落し大幅減。非鉄金属鉱は、過年では減少するも、下半期は市況上昇により増加。

鉄鉱石は、世界経済回復に伴い、粗鋼向けなどの需要回復が見込まれ、数量・市況共に緩やかに回復するが 2008 年度の水準には届かない。非鉄金属鉱は、数量・市況共に回復し、2008 年度水準にまで回復が見込まれるが、加工賃の悪化、円高、副産物処理等の下振れ要因が懸念。

2010 年度数量は、2008 年度上半期輸入量の通期換算値 (1.41 億トン) と 2009 年度の上半期輸入量の通期換算値 (年数量 0.98 億トン) の中間値 (1.2 億トン) 並。鉄鉱石価格は、2009 年度下半期鉄鉱石価格が 10% 上昇 (\$74.66/DMT)、プレートは 2009 年度並。

2010 年の鉄鉱石は、製鉄量の増加が見込まれるが、加工賃の悪化や円高、副産物の処理等の下振れ要因を含む。

原油及び粗油は、国内の需要が依然低迷する見通しだが、輸入金額は 2009 年度の大規模の反動から増加。

上半期は、2008 年度上半期の資源価格高騰の反動から原油及び粗油の輸入金額が 6 割近く減少したほか、LNG や石炭等、他の商品の輸入も大幅に減少し、鉱物性燃料全体の輸入は 55.7% 減。下半期は、上半期に見られた価格高騰の反動減の影響が弱まり、資源価格も緩やかに上昇する影響から、輸入金額の下落幅は縮小し、依然として実需は弱く全体的に数量ベースでは横ばい近い減減。

原油価格は振るやかな上昇基調。景気の低迷から国内需要が低迷するほか、原子力発電所の稼働の影響もあり、輸入数量は 2009 年度の水準をやや下回る。

輸入価格は、資源価格は緩やかに上昇基調が続く。数量ベースでは、原子力発電所の稼働の遅れ、2 割程度の 7 割程度の水準に回復するもの、2008 年度末から見て減少が続く。ただし、過年では 2009 年度の大規模な落ち込みの反動から 1 割程度の増加。

国内景気の低迷が続く。需要は微減傾向を見込むが、資源価格は緩やかな上昇傾向にあり、単価ベースでは (2009 年度末から見て) 緩やかな上昇。

資源価格・工業用引き続き需要低迷の影響を受け、減減または横ばい。

上半期は、数量ベースで 1 割減であったが、金額では資源価格の下落を背景に 54% 減。今後の原油価格は緩やかな上昇を見込む。数量ベースでは、景気低迷によって特に産業部門の需要が低迷し、さらに減少。

供給面および金融面から、原料炭、一般炭共に、価格は大幅に下落。下半期は、2010 年にかけて鉄鋼の対中輸出の鈍化が見込まれ、内需も弱い。大口電力も回復鈍く、下半期は数量も減少継続。

2008 年度後半に自動車等の生産が大きく落ち込んだことから国内の化学品の需要も低迷していたが、2009 年度に入り自動車や電気機械などの生産が回復に向かう中で化学品の需要も高まってきており、2009 年度後半も輸入は緩やかに持ち直している。

鉄鋼輸入は、リーマン・ショック後の国内需要低迷を受け大幅に減少し、低迷は当面継続。一方、非鉄金属は市況回復を受け、下半期は下げ止まりの動き。その他の製品も、下半期には自動車生産回復を受け下げ止まりつつある。この傾向は、当面続く。

鉄鋼輸入は、国内需要の低迷や国内市況も盛り返しに欠けることから、年初以来、前年を大幅に下回る水準で推移しており、この傾向は、当面続く。

アルミは、上半期は国内景気低迷により大幅減となったが、下半期にエコカー減税などの経済政策効果を受け持ち直しの動き。白金は、リーマン・ショック以降、市況低迷および需要減速から、上半期は大幅に減少、下半期は市況回復を受け持ち直し。

自動車、電気機器などの部材、包装用などの産業用途が、急落。リネンなどの最終消費財も、国内景気悪化のため減少。価格も、産業用、最終消費用を問わず下落傾向。

ガラス及び同製品は、上半期は国内景気低迷により、自動車、建設向け需要とも不振。下半期は自動車向けを中心に徐々に持ち直しの動き。

電算機類は、ネットブック(パソコン)など、PC および周辺機器の価格低下傾向は継続。上半期は、景気悪化に加え、後半にはウィンドウズ 7 発売前の買い控えも生じた。下半期は、ウィンドウズ 7 効果はあるが、年度を通じて数量への貢献は限定的。半導体等製造装置等、一部に回復の兆しもあるが、工作機械や建設・鉱山用機械などは回復し難い。

ネットブック(パソコン)など、PC および周辺機器の価格低下傾向は継続。上半期は、景気悪化に加え、後半にはウィンドウズ 7 発売前の買い控えも生じた。下半期は、ウィンドウズ 7 効果はあるが、年度を通じて数量への貢献は限定的。

トランジスタ等々は、価格下落が継続するものの、数量ベースでは底を打って推移。IC 製品は、継続していた価格下落が一服して横ばい近い推移する一方、低価格品を中心に引き合いが高まり数量は増加。液晶テレビ等は、上半期に引き続いて下半期も増加。

トランジスタ等々は、価格下落が継続するものの、数量ベースでは底を打って推移。IC 製品は継続していった価格下落が一服して横ばいに近い推移する一方、低価格品を中心に引き合いが高まり数量は増加。

自動車は、金融危機に伴う国内需要の低迷で激減。エコ減税の対象外となる車種が少ないため、回復見込みも薄い。航空機類は、新型機の納入が延期されたため、前年並にとどまる。

金融危機に伴う国内需要の低迷で、激減。エコ減税の対象外となる車種が少ないため、回復も見込みは薄い。

新型機の納入が延期されたため、前年並にとどまる。

精密機器類は、液晶デバイス・計測機を中心に需要低迷が継続。その他雑貨製品は、プラスチック製の製品は価格低下、日用品消費用品の数量減少が顕著。

景気が回復局面に入り、衣類輸入も総じて回復傾向に。基調としての価格引き下げ圧力はあるが、景気回復などで価格下落ペースは一服。金額でも増加。

(製品輸入比率 55.9%、前年比 5.3 ポイント上昇)

(製品輸入比率 55.4%、前年比 マイナス 0.5 ポイント)